
尊作成人

蒼際

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂作成人

【NZコード】

N5482A

【作者名】

蒼際

【あらすじ】

人は理解に苦しい事実、根拠のない事柄に対し、噂を称す。そんな噂を作る人達が居た。

>>十六夜の月の噂くく「出演隼人様」脇役「親父、親友、ホームレス様」

2年前の十六夜の月の夜。

まだ、この頃の日本としては珍しい西洋風のカラー・タイルを幾つも重ねて造られた潰れ掛けの商店街の歩道。

夜中の商店街は、みんな閉店していて、開店している店は一つもない。

とても、暗い商店街を青白い十六夜の月が、すこし明るく照らす。この商店街は、ホームレス達が寝る場所として使っている公共の場で、俺の周りには、ホームレスが地面に薄いダンボールを何枚も敷いてから、安眠とは言えない浅い眠りに落ちている。

俺の名前は隼人。上の名前はない。というか、昔に捨てた。捨てたのは、親友が殺された時。

親友はホームレスで、俺は世間で成金とか呼ばれるちょっとした金持ちの跡取りという、すこし異質な立場だった。

だが、そんな異質な立場であつても、俺と親友はそんな事気にしなかった。

「隼人！またあんなホームレスと一緒に居たそうだな！？」

家に帰ると、毎日俺は親父に怒鳴られて、殴られた。

金持ちは、自分より弱いモノを蔑むのが好きなようだ。

俺は、そんな親父、家族が嫌いだ。まだ、ホームレスの方がマシな生き物だ。

殴られた頬はあまり痛くはない。ただすこし口を切つただけ。

「けつ！ホームレスより、アンタの方がクズだよ」

血の混じった唾をフローリングの床に吐き捨てながら、反論する。

当然、これには親父も怒り心頭で、俺の胸ぐらを掴んでさうに殴

る。

毎日、その繰り返しだった。

あの日が来るまで。

朝の公園に転がる親友だった人間の体。全身をナイフか包丁で滅多刺しにされた死体。

世間では、こういうのを『無残に殺された死体』と言づらしが、本当にその通りだった。

だが、それだけでは、名前を捨てた過去の話としては成り立たない。

名前を捨てて、ホームレスになつたのはその日の夜の親父の一言だった。

落胆よりも絶望に近い感情を背負いながら、家に帰るなりに親父が嘲るような笑みを浮かべながら。

「ホームレスが死んだんだってな。あんな『ミミ』は死んだほうが世の中のためつてモノだ」

親父は、俺の今もつとも殺意を持てる言葉を、蔑みながら、愉快そうに言つ。

俺は、この目の前に居る人間を殺したい殺意を無意識の内に、殴る事で抑える。

こんな奴、殺したところで、あいつは戻つて来ない。無駄な罪など背負うだけ無駄すぎるから、殴つた。

地面に崩れている人は、指を差しながら、破門、勘当を意味する言葉を叫んでいる。

そこから先は、話さなくてもいい。今の現状がその答えだ。

今日の十六夜の夜は、夏場なのに、すこし涼しい風が吹いている。

『あいつのした噂話……根拠はなかつたが、面白かったのにな』夜はいつも、そんな事を思い出す。

「だるまさんが転んだの噂」主演「浅葱様、おとね様」上映時間「短い」

「浅葱ちゃん、髪洗つたら次は浅葱ちゃんが鬼だよ？」

小学校のトイレ内。トイレから廊下に駆け出していきながら「同じクラスのおとねって名前の少女」

浅葱は、私の名前で、鬼といつのはだるまさんが転んだつて遊びの事。

外でやつていたら、私は泥の土の中に転んでしまった。

短い髪は、泥に混じつて汚れた。

それで、トイレのお手洗いを利用して、髪を洗つている。私は、おとねの言葉を聞いて、ある噂を思い出す。

それは、髪を洗つている時に、『だるまさんが転んだ』と頭の中で唱えてはいけないつて言つ噂、いや、都市伝説だ。（だるまさんが、転んだ！）

「冗談で、そんな事を頭の中で唱えた。だけど、何も起きない。

やつぱり、これはただの噂だったのだ、と私は思いながら、顔を上げた。

私は、恐怖した。なぜなら、田の前の鏡には、絶対に存在しないモノが映り込んでいた……。

それは、鏡の中のもう一人の私だった。

『だるまさんが転んだ……』

鏡の中の私はそう言つと、口元が裂けて、生温い両手が私の顔を

掴んだ。

「いや――――――――――」

叫び声がトイレ内に反響して、消えていく。

そして。

「浅葱ちゃん！そろそろ出でときよ～」

痺れを切らしたおとねは、そつ言いながらトイレ内に足を踏み入れる。

鏡の前で、さつき洗つていたはずなのに、完全に髪の乾いた『浅葱』が立つている。

「浅葱ちゃん、早く行こうよ。」

「ええ、わかった」

浅葱は、正面の鏡を見つめながら、不気味な程口元を歪ませながらそう言つと、おとねと一緒にトイレから出で行く。

それから、学校のトイレのある鏡には、毎日映るやつです。

髪が濡れている顔を剥がれた誰かが……。

この噂には、続きがあります。

髪を洗いながら『だるまさんが転んだ』と頭の中で唱えた後、決して『鏡を見てはいけない』もしも、唱えてしまつたら、鏡を見ないでそこから立ち去つてください。

なぜなら、唱えた後に見る鏡には、恐ろしいモノが映るからだそうです……

へへだるまさんが転んだの噂 終わりへへ

「実証のない噂」主演「少年様、石様」
彼岸の川に向かつて少年は石を投げる。
川の水の上を跳ね飛びながら進んでいく石。
そして、石は批岸の岸辺に流れ着く。

「そつちにその人渡したよー！」

少年は叫ぶ。

「渡し人のお仕事ご苦労さん」

批岸の岸辺から返つてくる言葉。

そうここは、地獄の入り口の岸辺です。

「樂したいと思つてゐる人の噂」主演「十六夜様、皇月様」

『十六夜社長！この始末書全部読んでください』

皇月の声が聞こえると、目の前に始末書の書類の山が落ちてくる。
「俺に樂させるつもりはないのか！？」

十六夜社長は訴えるように叫ぶ。

悲痛の叫びにも似ていた。

頭上から皇月の声が返つてくる。

「ありません」

天使の囁きというよりは、悪魔の微笑みに近い声だった。
ここで、夢が覚める。

目の前に山積みにされた書類……正夢だった。
ため息と軽い願いを呴く。

「一日でもいいから、樂したいな……」

十六夜社長のただ一つのお願いの言葉。

「少女を拾つた噂」 主演「皐月様、十六夜様」

血溜まりの夜中の路地に佇むのは幼い少女。
生きていた人間は同じ人間に殺された。

少女は言つ

「どうして、動かないの？お父さんとお母さん」

今にも泣きそうな声は、路地に転がる肉塊を両親を差す言葉を伝える。

雨が小降りに降り出した。少女の表情は、雨に濡れた性で、泣いてるようにも見える。

誰かに、後ろから頭の上に手をポンッ！と置かれる。

振り返らない少女に通りすがりの男性は言います。

「これは噂だ。お前の両親はお前の小さい頃に死んだんだ。だから、これはお前の両親じゃなく、噂の塊だ」

「噂？」

「この噂は、俺がこの平凡な世の中に噂として伝える。それとも、噂にしないでおくか？」

年齢不詳の男は淡々とした口調で、少女に訊ねる。
どこか優しく、淋しさのある声で、少女に訊ねる。
少女は顔をすこしだけ左右に振る。

噂にしたほうが、楽になれる。

両親は殺されたより、死んでいたの方が良い。

男は夜空を見上げる。季節は5月の皐月だ。

「俺は今、助手が欲しかったんだ。お前の名前は今日から皐月だ」

「さつき？」

「良い名前だね？」

「うん！」

5月の季節に、私は皐月と名前を変えた。

「もしも少女が大きくなつた時の噂くく　主演「十六夜様、皐月様」

もしもシリーズ第1作目　主演皐月様と十六夜社長様。

「十六夜社長。この資料読んでください」

女子高生くらいまで大きくなつた皐月が、十六夜社長の机の上に山積みになつた資料を鈍く重い音をさせて置く。

「口一口と表情を笑わせている皐月。十六夜社長はそんな皐月の頭の上に拳骨を落とす。

「全部俺に読ませる気か！？半分くらいお前が読んで、俺の負担を減らそつとは思わないのか！」

事務所内に、十六夜の怒鳴り声が響き渡る。

皐月は拳骨を落とされた頭を片手で摩りながら。

「考えてませんよ。そんな事は　！ひやあ！！」

すこし捻くれた口調で言う皐月の両頬を、十六夜は軽く抓る。

「何だと！決めた、お前は今日残業だ」

怒りが沸点、臨界点に達しようとしてる自分を抑えながら、十六夜はそんな事を言つて、抓つていた頬から手を放す。

皐月は抓られていた頬を両手で押さえながら。

「何だか、大きくなつたら十六夜社長、扱い変わりましたね」

「そりやあ、変わるだろう。小さな少女を叩くのは幼児虐待になるからな」

もう時効だ。十六夜は軽い口調でそう付け足す。

皐月は、言葉には出さないがこう思えた。

『大きくならない方が良かつた』

それは、ちょっとした後悔の言葉。

vvv評価さんvvv 「メンテーター」「おかま様とあかま様」受付
「十六夜」

『これは一体何なのよー? どう思いますー? あかまさこ』 b yおかま
「どうせいつもないわよー」 b yあかま
vvvあかもも、お前らは誰? vvb y十六夜

>>十六夜の月眺めていた噂1<<

主演「隼人様、臯月様」 脇役「親友様」

エキストラ「数人」 カメラアングル「隼人様」

十六夜の月が昇るまで、後1ヶ月を過ぎた真夏の夜。商店街はこの1年で、半数以上の店舗が閉店、廃業した。この不景気なご時世で、こんな規模の小さい商店街で経営するのは限界だ。

ホームレスの食事は、週に一度だけ行う炊き出しで、生活の半分を賄っている。

だが、炊き出しがない日は、常に空腹感を味わう事も、事実だ。今日も、空腹感をいつものように味わっていると、雨が降り出す。最初は小雨だったが、すこしずつ雨は激しさを増して、大雨に変わる。

屋根が錆びて、撤去された部分、俺の頭上から雨が降り注ぐ。真夏の夜は、とても暑く、雨が降った事で、ただの暑さは蒸し暑さに変わる。

まだ、雨に濡れていた方が、この暑さをすこしでも涼しいモノに変えられる。

気がした。 急に雨が遮られた。空腹感を瞳に滲ませながら、俺はすこしだけ、顔を上げて見上げる。

白いビニール傘は雨水を弾く。薄い肌色の手は、見間違えれば雪のように白く見えて、艶のある黒髪が肩にすこしかかるくらいの髪の長さ。妙齢で綺麗な顔立ちの女性だった。

高嶺の華……女性見た時の第一印象は、その言葉だけだった。

女性は何も言わずに、ただ俺を見つめている。『ホームレス』とか言つ概念を全く気にしていない、綺麗な黒い瞳には薄つすらと茶

色を宿している。

だが、女性の瞳は、どこか、寂しさを滲ませている。
時間が止まったように、スローに感じられた。だけど、悲しい事に、それだけしか感じられない。

俺の時間なんて、もう止まっている　いや、壊れてる。
よく、こんな表現をしたら、命とか記憶とか感情とかを表しているが、俺の壊れたはそれとは違つ。

感情は壊れてないのはわかる。空腹感を感じるから。

記憶が壊れてないのはわかる。まだ新しい記憶に埋もれてない部分の記憶は思い出せるから。

命が壊れてないのはわかる。なぜなら、まだ生きているから。

じゃあ、何が壊れているんだ?不意にそんな疑問を考える。
わからない……自分でも、何が壊れているのかがわからない。
曖昧な自分……そんな自分が、笑えない。

女性は一言だけ、呟くように言うが、聞き取れない。

今度は聴き取ろうと、もうすこしだけ顔を上げて、耳をすこしだけ研ぎ澄ませる。

「このまま、雨に濡れていたら風邪になつて、熱出すよ?」

線の細い澄んだ声。今度は聴き取れた。

この状況で、よくそんな素朴な言葉を言えるな。当然な事を言わ

れて、妙に関心してしまつ。

『そうだな』返す言葉が、口から出でこない。じじで、俺は壊れていた部分に気付いた。

唯一親友と呼べる人物が殺されて、家を出て行つてホームレスなつて以来、何も、言葉を口にしていない。

そう、壊れていたのは、『俺の声』だつたのだ。
手をすこしだけ上げて、空中に見えない文字を刻んだ。これで、伝わるはずはない、無意味な行為だとは、自分でもよくわかる。

だけど、この女性は。

「何を伝えないのかは、わからないけど……君は手話を知ってる?」
線の細い澄んだ声から出た言葉は、素朴だけど、どこか温かく錯覚してしまつ。

女性は続ける。

「これが『はい』そして、これが『いいえ』簡単でしょ? じゃあ、質問します。君は話せないの?」

とりあえず、俺は女性が教えた手話の『はい』の動作をして答える。

空中に見えない文字を刻むよりは、まだ手話の方が効果的だ。

「それは、何かの『障碍』で話せないの?」

これには、手話の『いいえ』で答える。

『障碍』は、『障害』を言い換えた言葉で、障害よりまだ障碍の方が、障害なんて差別した言葉より、まだ障碍の方が柔らかく、差別意識は少ない。

そこから、この女性の仕事などは予想出来た。きっと、介護の仕事をしているんだろう。

根拠はないが、多分、正解だと思つ。

「もし、君が空腹だと感じたらでいいから、これ、食べて」

今まで気付かなかつたけど、女性は片手に提げていた白い鞄の中から、タマゴ型の弁当箱を取り出しながら、俺の目線まで屈んで手渡す。

「あ、これが、『ありがと』の手話だからね。今日はこれでバイバイ」

女性はとても明るい口振りでそつそつと、踵を返して歩き去つていいく。

渡された弁当箱は……見た目以上に重みがある。

でも、その重みは決して、弁当が重い訳じゃなく……自分でもよくわからない感情で、懐かしい重みだった。

弁当箱を凝視していると、不意にこんな事を考えてしまう。

あの女性の名前、わからないままだったな。言葉が喋れないから、向こうが名乗らないとわからないままだ。

でも、あの女性は『今日はこれで』と言っていたから、多分だけど、また明日も来るかもしけない。

それにしても

この弁当は、見た目以上に不味いな。

♪♪十六夜の月を眺めていた噂2くく　主演「隼人様、臘月様」
カメラアングル「隼人様」

雨は止まずに、激しさを増していく一方だった。

屋根が剥がされた一部からは、雨水が滝のように、地面に叩きつけるように流れ落ちている。

多分、あの流れ落ちている雨水の下に座れば、どこかの滝に打たれる修行僧のモノマネが出来るんじゃないかと思つ。
だけど、そんな馬鹿な事は小学生、いや、幼稚園児でも多分しない。

いや、絶対にしない……『絶対』とは言い切れないな。

地面を叩きつけるような雨の音だけが、この潰れ掛けの商店街に鳴り響いている。

蝉の泣き声よりは、まだ五月蠅くはない方だけど、多少なりとも五月蠅い事には変わりはない。

「こんにちわ」

五月蠅い雨の中なのに、とてもよく聞こえる線の細い澄んだ声の妙齢の女性が言つ。

後ろから来た性で気付かなかつた事もあつたが、この五月蠅いくらいの雨の音で足音が搔き消されていたのが本当の理由かもしれない。

空が黒い分厚い雲に覆われている性で、今が昼なのか、夜なのかわからなかつたが、この女性が『こんにちわ』と挨拶してきたんだら、きっと昼だ。

浅葱色のカットソーカーディガンとヒーメのスカートを着こなしている。

女性の手には畳んだ傘とどこかで買い物でもしたのか、女性としては大きいくらいの白いビニール袋を手に提げている。

「昨日の帰り道にね、すこし考えたんだけど」

そう言いながら、袋の中から白いスケッチブックサイズのホワイトボードと黒の油性ペンを取り出して、

「手話だと、君はあまり話せないと思って、このホワイトボード使つて話そ」

綺麗な整った顔を一瞬見せながら、俺の手にホワイトボードと油性ペンを手渡す。

なぜ、いきなり渡す？ しかも、なぜいきなり親しげな流れになる？ 疑問……理解が出来ない。何だか、訳がわからなくなつて、ただホワイトボードを凝視する。

なぜ、俺はこのホワイトボードを凝視しているんだ？

そう思つと、女性は片手で口を軽く押さえながら笑つてい。

押さえているのは、笑い声をすこしでも漏らさないようにしてい

るだけだ。

何だか、自分が恥ずかしく思えて、勝手に苦笑いを浮かべてしまふ。

「深く、考えすぎ、だよ……あ、そういうえば君の名前、聞いてなかつたね」

笑いを堪えながら、女性は俺の名前を訊いてくる。

声を出そつと、口を動かしてしまつ。でも、それは無意識の内にした事。

早速、このホワイトボードを使わないといけないのか……俺は、昔から黒板やホワイトボードとかに言葉を書き込むのは苦手だった。

いや、言葉を書く事自体が苦手なんだ。

でも、今は書くしかない。出来るだけ丁寧にホワイトボードに書き込む。

一応、『隼人』と書いた……つもりだつた。

「何だか、ミミズみたいな字だね……隼人君ね、私は皇月。隼人君

には、すこし字を書く練習したほうがいいかもね」「苦笑い気味に皐月はそんな指摘を言う。俺はとりあえず、顔を頷いて答える。

♪♪絵の噂♪♪　主演「千里様、カナ様」
カメラアングル「千里様」

私の名前は千里と言つて、近くの大型デパートで働いています。実は、私の娘のカナが、数ヶ月前から奇妙な絵を描いているんです。

その日も、我が家に帰宅した時にも、その絵を描いてました。

「ただいま。カナちゃん、今日は何が食べたい？」

台所に鞄を置きながら、いつもと同じようにご飯を支度を始めながら私は言つ。

居間と台所は繋がつてあるから、すぐに返事が返つてくると思いましたが、返事は返つてきません。

「カナ？」

すこし、心配になつた私は台所から居間に足を運びます。

居間では、カナが落書き帳一杯に絵を描いてました。

真っ白な紙には、じちやじちやした赤い大きな丸に黒い丸が二つ。そしてその下には大きな黒い丸が一つ。

私は、その絵が気味が悪くて仕方がないません。

「ねえ、いつも何の絵を描いているの？」

すこし屈んで、ゆつくりとした口振りでカナに質問をする。でも、カナは千里の質問は答えずに、無視して絵を描き続ける。私はすこし苛立ちを覚えて、

「言いなさい！何を描いているの？」

荒々しい声で、私はカナに訊ねた。

カナは絵を描くのをやめて、振り向かずに答えます。

『お母さんが死ぬ時の顔』

私は、娘のカナの答えに酷く寒気を感じました。

そして、私は娘から落書き帳を無意識の内に取り上げてしまいました。

「あ～あ」

カナはやる気のない呻きのよつたな声を出しながら、私の後ろを見上げます。

私は振り返った。その先には黒いパークー姿の人人が立っていて、手にはアイスピックが握られています。

そして ！

ここで、意識はなくなりました。殺されたのです。

闇の中、こんな声が聞こえた気がします。

『おい、この絵と殺されたこの死体の顔……』
『似ていますね……誰が描いたんですか？』

『数年前に死んだ。この死体の娘さんだよ』

予告CM『なあ、お前は尊になりたいか?』

「はあ? 何言つてんだよ? 粧野郎!』

「尊作成人・十六夜の尊くく 主演「十六夜様、皐月様」エキ

ストラ「多数」

カメラアングル「十六夜様」

蒸すような暑さの5月。昨日から梅雨の時期になつたのだから、当たり前だ。

空は灰色の雲に覆われて、炎のような太陽は隠れている。

薄暗い事務所の天井には、煙草の煙が満ちている。

煙草を吸うのは、年齢不詳の男性。名前は『十六夜』と言つ一風変わつた名前だ。

灰色の胸のすこし開いたシャツからは、満月のようで、すこしだけ欠けている十六夜の月を象つた女性物のネックレスを首に提げている。

「皐月、後から読むのは面倒だから、溜め込んでいる資料持つて来い

口に咥えている煙草のフィルター部分を片手に掴みながらそう言うと、目の前のテーブルに置かれている灰皿の底に、煙草を押し付けて火を消す。

十六夜の口からは、勢よく吸つた煙草の煙を吹き出している。

「いいですけど、何で今持つて来いなんて?』

事務所内の黒いソファーに腰掛けている6歳くらいの少女、皐月が訊く。

そんな事は決まっている。十六夜は面倒そうな口振りで、「お前は俺に一気に資料を見せてくるからな。それだと、俺が辛いだけで、樂の文字の欠片もないだろうが」

だから、せつさと持つて來い。そう言葉を付け足す。

皐月は納得したのか、事務所の奥に走つていく。

十六夜は不意に、どんだけ厖大な資料の数溜まつてんだ?

ある意味、どんなモノよりも資料の数が一番、恐怖だ。

後ろにあるすこしだけ大きなガラスの窓のブラインドが開いている性か、激しさを増している雨水が、窓に激突でもするような勢いで、窓を打ち続けている。

そんな窓と風景を見ていると、昔の事……『皐月』と書つ名前の女性を不意に思い出す。

「まあ、過去は人間には必要だしな」

小声でそう呟いた。簡単な言葉で、俺はいつも片付ける。そんな癖がついてしまった。

「はい！これが溜め込んだ資料です」

テーブルに重たい衝撃が走る。目の前に突然置かれた資料の山は、俺の想像を超えていた。

「この厚みは何だ？一体、何千枚ある！？」

いや、これはそんな問題の量じゃない。

言葉をすこしだけ修正して、再び言葉にする。

「一体、何ヶ月溜め込んだ資料だ？」

「えっとですね……忘れましたけど、何だか、埃を被つたダンボール箱20個分です」

「そんなモノを持つてくるな！捨てる！！」

事務所内に、十六夜の怒鳴り声が響き渡る。皐月はすこし驚いたのか、五月蠅かつたのか、両手で強く耳を押さえている。

十六夜は、長ズボンのポケットに片手を突っ込んで、煙草のケースを取り出すが、煙草はなくなっている。

これには、正直最悪だと思つた。

「煙草切れたんですか？」 どちらに？

6歳くらいの少女・皐月はそう訊く。 十六夜は頭を搔きながら立ち上がり、事務所の出入口のドアのドアノブを片手掴んでドアを開く。

皐月は、大人びた口振りで再び質問する。

十六夜は振り返らずに、

「煙草を買いに行く 留守番しどけよ」

そう言うと、ドアが完全に閉まる。ドアの先は、隣の建物と事務所を挟んだ路地裏に出る。

傘は持たないから、雨の日に外に出る時はいつもずぶ濡れになる。でも、俺は雨の打たれていた方が、気分が楽になる。昔の事を思い出すが、それもいいと思つていて。

辛い過去ではあるが、俺には辛い事がある方がお似合いだと、最近思つていて。

蒸し暑い空氣の中、雨に打たれていた方がすこしだけ涼しい。黒く前髪がすこし伸びた大雑把な髪は雨で濡れて、纏まつた感じになつていて。

歩道を歩く人々は、俺以外みんな傘を差している。黒、赤、青、黄色……スケルトンの傘もある。

俺は思うのだが、傘つていうのは人の心を映しているのだと、最近思う。

黒の傘は暗い自分を、赤の傘は情熱とか、綺麗な自分を、青の傘は清く良い自分を、透明な傘は曇りのない自分を、そして。傘のない俺は何もないんだと、最近思うんだ。

そういうえば、昔に傘をくれた女性が居たな。妙齢の綺麗な女性……そして。

『十六夜』に殺された女性……。

売店は事務所から1キロ離れた場所にある。

古びたちょっとしたトンネルを抜けた先に、売店はある。売店に到着すると、いつも吸っている銘柄の煙草を指定して、出された煙草を270円で買う。

煙草のケースのラベルには『ブラックホワイト』と記されている20本入りだ。

事務所に戻るまで、煙草のケースのビニールは外さない。雨に濡れて湿気ると煙草が吸えなくなる。

何も変わらない売店の帰り道だとは思つたが、俺はなぜか、人に周りを囲まれやすいみたいだ。

「おい、おっさん！殺されたくなかったら金だしな！」

俺の周りを囲んでいる街のチンピラの一人がそんな事を言いながらナイフをチラつかせる。

刃渡り20センチ程度の折りたたみ式ナイフ。チンピラの数名は、嘲るような笑いさえ浮かべながら、十六夜を見下すような目で見ている。

これが世間で問題になつてゐる『恐喝』って奴なんだろうか？俺には小遣いを求める子供にしか見えない。

「これは助言なんだが、脅すならナイフじゃなく、銃にした方が効果は高いぞ？それにな、邪魔だ」

強調力のないやる気のない眼差しで、十六夜はチンピラ達を一蹴する。

これには、チンピラは激怒したようだ。

「なに涼しい顔してやがる！ぶつ殺すぞ！？」

威勢良い叫びに似た大声。威勢よく十六夜の胸ぐらを掴んで、首にナイフを押し当てるチンピラの一人。

さすがに、これには十六夜も我慢の限界である。

「なあ、お前は噂になりたいか？」

重苦しい口振りで、十六夜はチンピラに訊ねる。

「はあ？何言つてんだよ？糞野郎！」

大きな声で、チンピラは喧嘩を売るよう答える。

そうか。十六夜は小さくそう呟くと、自分の胸ぐらを掴んでいるチンピラの片腕を片手で掴んで。

バキヤツ！チンピラの腕の骨が砕けて、皮膚を砕けた骨が貫く。

「あがつ！－」

変な叫び声をチンピラは発する。逃げられないようにしないとな。

砕けたチンピラの腕から掴んでいた片手の握力を0にする。掴む力がなくなれば、すんなりとチンピラの腕から自分の手を放す事が出来る。

両手を、トンネルの2方向の出入り口に翳す。逃げれないように、見えない檻を張つた。

これは、ちょっとした種無しの手品だ。檻を張ると、とりあえず先に腕が砕けた方から噂になつてもらう事にした。

十六夜の片手が、腕の砕けたチンピラの首を掴む。

「噂はそうだな……『トンネル内の噂』にでもしておくか」

そう言つと、首から手を放して、チンピラの口の中に手を突つ込んで、食道、気道を潰す。

チンピラは膝が崩れて、地面に倒れる。そして、砕けた骨が剥き出しになつている腕に心臓の部分を乗せて、骨が心臓に突き刺さつてチンピラの一人を死んだ。

残つたチンピラは見境もなく、俺に向かつて一斉に殴りかかる。十六夜はズボンのポケットの中から、事務所の鍵を取り出して、片手の指と指の間に挟んで、チンピラを一人だけ残して、他のチンピラの喉を鍵で引き裂いた。

息が出来ずに、出血多量で息絶える。あつという間にチンピラは一人を残して全員、死んでしまつた。

残つたチンピラは、その場に尻餅をついて、恐怖している。

「お前は一体、何なんだよ！？」

チンピラは叫んでいる。だが、とりあえず答える事にする。

「2代目噂作成人の2代目十六夜だ。噂になる前に、一つだけ教え

てやるよ。このトンネルの見えない檻は、俺の16の内の一つの能力だ。能力には一つ一つに発生条件があつてな」

十六夜は言葉を途中で止めて、チンピラの頭を掴む。

「今から使う能力は、『桜の木』って奴なんだ。この発生条件は厳しくてな、使用したら、恐ろしい程、腕の骨が軋むんだ。そして、発生条件は『相手の体に1分間触れ続ける事』だ」

60秒経つたな。十六夜の言葉が終わると、チンピラは両目を大きく丸くした。

だが、すこし遅かつた。チンピラは一瞬で、開花した桜の木に変わってしまった。

トンネル内に突然生えた、季節外れの桜の木。十六夜は踵を返して、事務所に帰る。

十六夜は、トンネルからすこし歩いたところで、小さな声で、「トンネル内の噂の内容は、どこかのトンネル内に、季節外れの桜の木が生えて、屍の上に綺麗な花びらを散らせていた。噂になつてくれてご苦労さん」

そう呟くと、十六夜は雨の中に消えていく……。

次回の噂の予告

『次回の噂はちよつとした怪談モノです』 by 皐月様

「良い『靈の尊』主演「栄治様、佐奈様」ボイス提供者「幽靈様」

カメラアングル「栄治様」

「の話は、俺と佐奈が夜中にある山道を車でドライブしていた時の不思議な出来事です。

俺達は予約していた旅館を目指して山道を車で走っていると、二つの分岐点に到達しました。

何も書かれていない標識に、古びた左右の矢印。「これで、一時車を止めた。

車内で、俺は旅館のパンフレットを読み直してみたが、パンフレットには、分岐する道の事を書かれていた。

「栄治、もしかして道に迷ったの?」

助手席に座っていた佐奈が、すこし心配そうな顔で訊いてくる。本当のところは、道に迷ってはいないはずなのだが、状況から言えば迷っている。

「とりあえず、左の道に進むか。行き止まりなら、また戻れば良いだけだしな」

「迷った事に対しても、何も言わないのね」

佐奈はため息を漏らしている横で、俺はハンドルを左にすこし切つて、アクセルを軽く踏み込んでいく。

車を左の道に走らせていくと、車内に伝わる振動がすこしだけ大きくなっていく。

「の道はどうやらあまり整備されていない道。時間的にはもう夜の11時を回り、周りには光の欠片すらない暗闇だ。

何時間か走らせて、何も見えない。道を間違えたんだろうか？心配になつた佐奈は栄治に向かつて、

「ねえ、もう戻つた方が良いんじゃない？」

確かに、もう戻つた方が良いのは自分でも薄々気付いている。視線をすこしだけ、佐奈に逸らして

「そうだな。これ以上はすこし不味そうだしな」

そう言つて、視線を再び前方に向けた。俺は驚いた。

前方に、子供が横切つた。栄治は反射的にアクセルからブレーキに右足を切り替えて、車を急いで急停止する。

鼓動の動悸が早くなる。そして、急いで車の外に出た。

轢いてはいかないか？子供は？そう思いながら周りを見回したが、不思議な事に誰も居ない。

すこし、安心した俺はすこし目を凝らして前方を見る。なんと、前方は断崖絶壁で、先には道がなかつた。

あともうすこし、ブレーキを踏むのが遅かつたら、俺達は車ごと転落して、死んでいた。

車の中に戻ると、佐奈は一言。

「今横切つた子は、きっと私達を助けてくれたんだよ」

安堵の色を顔に浮かべながら、佐奈はそう言つと、後ろから、

『落ちちゃえば、良かつたのに……』

寒気を覚える程、冷めた生氣のない声が、後部座席の方から聞こえた。

栄治は後ろを振り返つてみるが、誰も居ない。だが、変化があつた。

後部座席の一部が、水を零したように濡れている。俺は背筋がゾツとして、急いで車をバックさせて、その場から急いで離れる。

車をバックさせた直後、前方に子供が佇んで、こちらを眺めている。

濡れた短い髪からは水が滴り、片目がなかつた。そして、口を動かしている。

『落ちれば良かつたんだ！』

遅い人物紹介

人物紹介

>> 隼人／十六夜 <<

ホームレスだった親友が死んでからすぐに両親とは勘当、出家してホームレスになる。

十六夜の夜まで後数ヶ月の商店街の夜に、妙齢の女性・臯月に出来逢う。

出逢った直後は言葉を発音出来なかつたが、次第に発音出来るようになるまで回復。

十六夜の月の夜に、初代十六夜に臯月が殺される。
初代十六夜とある約束を交わした後、隼人から2代目十六夜に改名する。

十六夜になつた直後、初代十六夜に脳の一部を外部から刺激、破損させられ、『十六夜』の特殊な能力を受け継ぐ。能力の数は現在16個。身体能力を向上する能力はない。

外見は前髪が多少伸びており、左目が前髪で隠れている。

年齢不詳。身長は179センチ（推定）

>> 肢月／19歳 <<

外見は妙齢で綺麗な顔立ちをしている。職業は介護関係の仕事。
線の細い澄んだ声。

年齢は19歳（生きていたら現在22歳）

十六夜の月の夜に初代十六夜にナイフで腹部を刺されて殺される。
性格は穏やかで優しいが、泣き虫。

›› 露月／7歳 <<

両親は通り魔に惨殺される。その後に十六夜の拾われて、現在は仕事の一部を手伝っている。

何でも溜め込む癖があり、それでいつも十六夜に怒られる。

後の人物はその場限りのエキストラ、俳優、素人なので説明はない（設定もない）

›› 会話だけ劇場 <<

「どうも～噂作成所の受付嬢の露月です」 b y 露月／子供
「そんなガキな受付嬢は居ないだろ？」 b y 十六夜
「おっさんが……（黒い部分の呟き） b y 露月／子供
「おい、一度噂になりたいか？」 b y 十六夜

「で、では、本日はここでさよならです！」 b y 露月／子供

⋮⋮⋮

閉会式

「閉会式」ナレーター「十六夜」

ついに最終回（早すぎかもしれないが）。

「十六夜の月の噂」の過去話から始まって、全9話（自己紹介は除いて）

「だるまさんが転んだの噂」は始めてのホラーな物語で、これは実際に都市伝説にある話。

これを書き始めた時に思っていたのは、簡単に物語に直して、わかりやすく理解してもらいたいと思っていたんだが、結果的に訳のわからない物語になってしまった。

「実証のない噂」も実際にある都市伝説の話で、これは簡単に書けた。

「楽したいと思っている人の噂」は単なる暇潰しだったのを思い出している。

「少女を拾った噂」はどこかの小説投稿サイトで大批判を浴びたのを痛感させられた記憶しかない。

「もしも少女が大きくなった時の噂」これも大批判を浴びた（お粗末な作品でしたので）

小説書くのには完全に向いてないのかと、強く覚えさせられた作品だった。

「十六夜の月を眺めていた噂」は未完で終わつたが、最終的な結果は『皇月が初代十六夜に殺されて、噂を200個以上作つたら皇月を生き返らせる約束をして、噂作成人になった』これが最終結果。

「絵の噂」も実際にある都市伝説だ。

これは難しい事に、『お母さんの死顔』としか台詞がなかつたた

めに、最後の結末も、台詞をすべて自作だった。

›› 噂作成人・十六夜の噂くくこれは駄作中の駄作だと後々判明した。

最後の››良い靈の噂くくは、實際にある都市伝説なのだが、教訓にはなっていると思われる。

靈が人を助けたのは、殺し損ねたために、結果的に人を助けてしまった、を描いている作品だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482a/>

尊作成人

2010年10月8日15時51分発行